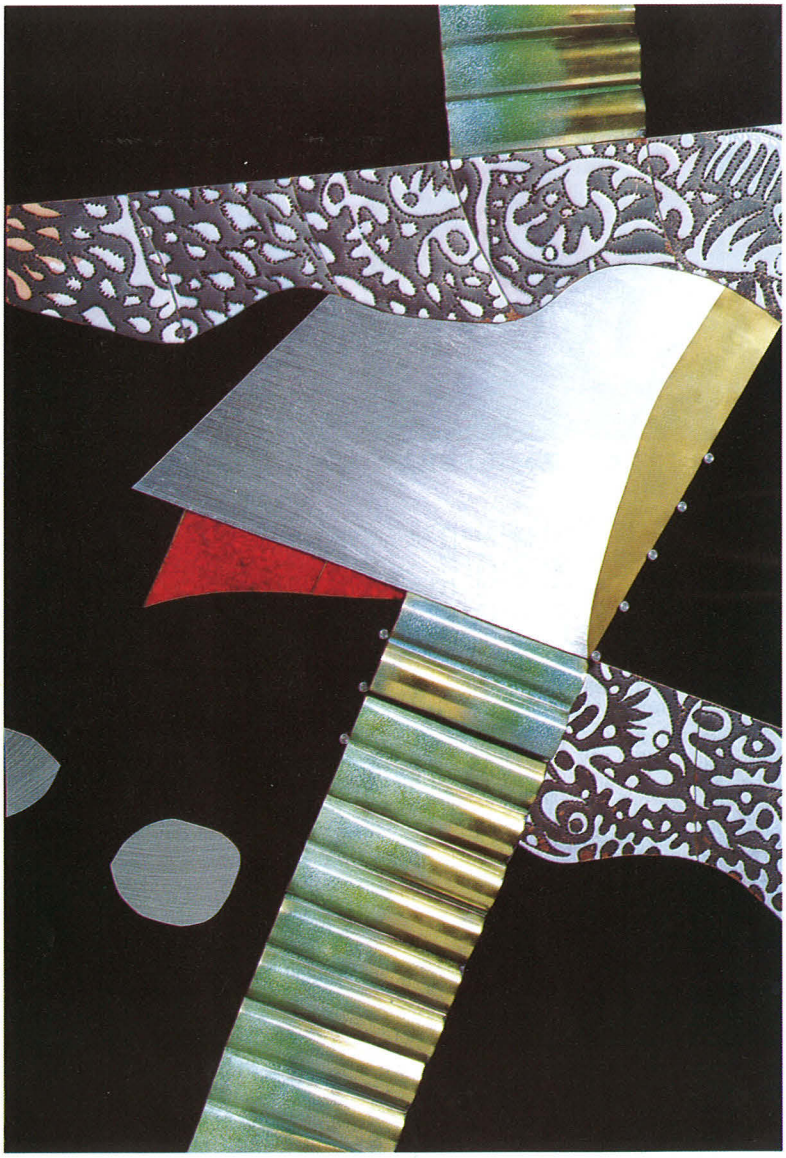
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

# 文化高知

'99年9月 NO.91



「風化シリーズ 壊律」 三木良子

〈もくじ〉

路面電車のつぶやき …… 野々宮慧 2
芝居創りの楽しみ方 …… 竹邑 類 3
ミュージカル「光の中で…」 …… 寺澤悦治 4〜5
南の国に暮らして－アジアの南、日本の南－ …… 島村和典 6〜7
回想……日和崎尊夫君のこと（中） …… 田中白歩 8〜9
高知県人気質と事件 雑感 …… 稲田知江子 10〜11
山はスキーに温泉・キノコ(5)〜キノコなくして秋はなし①〜…大森義彦 12
ニューヨーク通信③何か特別なもの…… 奥山 緑 13
風俗歳時記・風伯 …… 14〜15

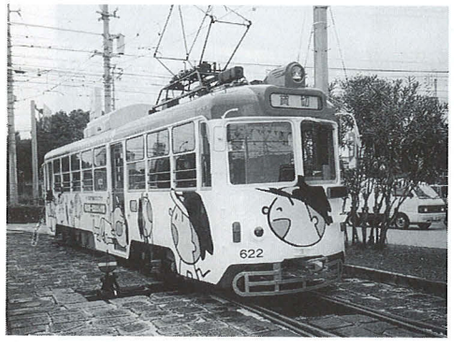
(財) 高知市文化振興事業団

# 路面電車のつぶやき

野々宮　慧

私は電車。この街を走りつづけて九十五年、老体ながらバリバリの現役です。ゆったり、のんびり、人に優しく公害出さずをモットーに、「雨ニモ負ケズ　風ニモ負ケズ　雪ニモ　夏ノ暑サニモ負ケズ……」、ただただ走り続けました。地震や風水害、そしてあの忌まわしい戦火などさまざまな試練によくぞ耐えたと褒めてやりたい気持ちです。特に高度成長期、レールの上しか走らない頑固ないごっそうさ故に、自在に動くバイクや自動車の利便性には敵せず、時には邪魔者扱いされながらも何とか懸命に生き延びて来ました。振り返って感慨無量の一世紀です。

高知の電灯は明治三十一年、七百灯の淡い光を灯したのを嵩矢とします。それから僅か六年後に、「乗り出し（現グランド前）―堀詰」間及び「梅ノ辻―桟橋」間に日本で十番目の路面電車としてデビューしました。明治十八年上野の勧業博覧会場に最初に展示されて僅かに十九年後です。成し遂げたのはあの明治青年達。前例なく、技術なくまたそれ故に経験もなかった時代に、当時文明の最先端にある高価な私を、この僻遠の地土佐に走らせた、いかにも明治人間らしい一見無鉄砲とも言えるその情熱とエネルギー、そして、先駆者達が一様に備えている柔軟性とパワーにほとほと感服します。


今年７月には「フクちゃん電車」もお目見え

火も煙も出さず、天空に張られた一本の細い電線に、屋根から伸びたポールの先の小さな滑車が転がっていくだけで鉄の車輪が回転し、大きな図体の私が動く、人力車が主役の時代に初めて私を見た人達は本当に驚いたと思います。

そんな私もあと五年でいよいよ百歳、明治・大正・昭和・平成とそれぞれの時の流れと激動の歴史を見つめて来ました。日本に現存する仲間内では最も古いものとなっています。だから今や私は、郷土の先覚が遺してくれた県民共有の歴史的資産だと自惚れています。そんな貴重なものが高知にはあるのです。高知から発信できる日本一のものと言ってはいけないでしょうか？

そんな訳で私の夢は拡がります。

例えば、二十世紀の人間は破壊と建設をくり返しながら、その文明を極度に発達させ、生活の質を向上させましたが、一方ではその矛盾も尖鋭化しました。だから次の百年はきっと人間性の回復とか心の優しさへの回帰が主要テーマになると思います。そして環境破壊への反省から、その回復への努力が世紀的な課題となる筈です。

私達は排気ガスなど一切出さない、人にも環境にも優しい「のりもの」ですが、文明に追われて次々に姿を消し、日本ではもう十九都市にしか残っていません。でも、世界にはまだ沢山の都市で、むしろ見直されつつ元気に頑張っています。そこで二〇〇四年私が丁度百歳を迎えた時を機に、「世界路面電車サミット」を呼びかけたいのです。世界中の電車のある街々から、それをとりまく人々をこの土佐に迎え、新しい時代の環境問題や都市交通問題を考える機会を共有することは歴史的意義があると思いませんか？　「やさしさと龍馬に会える元気都市」を目指す高知市へ世界中の電車好き人間が集うなんて考えただけでもワクワクします。明治人のロマンに二十一世紀の扉を開く人々が新しい意味を加えることにもなりましょう。

日本六十余州、電車の走る風景が稀有のものとなりつつあります。私は「日曜市」とともに高知の歴史的景観、いわば動く観光資源と自負しているのですが、幸い私のメンテナンスと運行に携わっている会社も私と同じ気持ちで頑張ってくれると言っています。どうか応援して下さい。

（ののみやあきら・土佐電気鉄道㈱代表取締役社長）



# 芝居創りの楽しみ方

竹邑　類

例えば、この夏の様に東京では暑かったり、また、高知では豪雨が続いたりと、季節が激しく揺れるように。

芝居づくりの現場もまた、いつも、激しく、熱く、行き着く先を求めて沸騰している。

僕もまた、若い頃から、時代の流れに、ある時は影響されたり、ある時はリードしたり。そしてリードしすぎて、時代が後からついてくる時もあり、さまざまな局面が現れては消え、ここに至る。そして、この頃は「時代」は関係なく自分の創りたいものを創っている。そして、それが主流になったり、アバンギャルドになっている。

最近、僕は芝居では「コメディ」に凝っている。それもまた、人間の苦悩や精神がファンタジーと捉えられる作品を創ろうとしている。

ここ最近の作品では池畑慎之介主演、ノエル・カワード作「花粉熱」、渡部篤朗主演「ボーイング・ボーイング」、夏木マリ・片桐はいり・根岸季依主演「ヴァニティーズ」、浅野ゆうこ主演「40カラット」。等々。

現在稽古中のミュージカルコメディ「アパートの鍵貸します」。これはニール・サイモン作、バート・バカラック音楽、あの名作映画の舞台ミュージカル化である。そして、二〇〇〇年一月高知上演「グッバイ・チャーリー」がある。

「コメディ」の創り方の醍醐味は人間の性格、生活、表現の妙がある。人間がその時、その対人関係で何をするか、どんな声を出すか、どんな表情をするか、どんな感情でいるか。等々を、稽古の過程で発見そして吟味、やがて「それだ!!」と言う確信に至る。それこそが芝居創りの楽しみの一つなのである。現在稽古中一九九九年秋に東海地方巡演の「アパートの鍵貸します」では、男と女の愛と恋のもつれが、ありきたりのステレオタイプの表現ではなく善も悪もない、人間の真実の落差が、「笑える」と言う観客の選択につながるように、また、シリアスな歌や楽しいダンスナンバーが物語の意図を深めていく演じ方、つまりミュージカルは歌もダンスも演じるのである。心が登場人物の〝間〟や時間を支配して「至福の刻」を創るのである。

一月上演の「グッバイ・チャーリー」はもっとファンタジックな人間関係の愛のメルヘンが舞台に輝くのである。ピーターこと池畑慎之介さんの絶妙な演技が爆笑を重ねてやがて、愛の涙へと変わる、芝居を観る楽しさを十二分に備えている作品なのである。そこでも、また人間の愛の本質に迫る、心理のちょっとした行き違い。ちょっとした気持ちが、人生を決める、人間の可笑しさ、哀れさ、そして摩訶不思議な人間という生き物を厳しくそして優しく見守っている。

そんな稽古場の空気が作品を発酵させ豊かにしていくのである。

人間がいて、人間による、人間のための芝居創り、僕はそれを目指しています。

なあんちゃって!!　でも、これは本当です。僕と僕のカムパニィの芝居創りには愛があるのである。

「コメディ」に対する、日本の演劇界の評価の低さに対して敢えて挑戦する〝ネオいごっそう〟の心境である。

（たけむらるい・演出家）

「グッバイ・チャーリー」より。左から村上理佳子、池畑慎之介

# ミュージカル『光の中で…』

寺澤悦治

## 心の中の光

平成九年に高知市文化振興事業団から、光栄にも市民ミュージカル第四弾を制作するに当たって脚本を全国から募集するので審査員になってほしいという話がありました。

審査の結果、数ある作品の中から「ミュージカル『光の中で…』」という作品が最優秀に選ばれたのですが、このタイトルが心の奥底に何か強烈に染み込んでいくのを感じました。

当然のことながらその時点では、自分が演出をするなどとは思いもよらなかったですから、もし最初から自分が演出をする作品ということで選考するとしたら、この作品は選んでいなかったのではないでしょうか(笑)。とにかくテーマが深くて広すぎますから。正直な話、未だに《光》って何なんだろうと悪戦苦闘しています。

光とは何か……、一言で言えばそれは「愛」と呼ばれているものかもしれない。本質的には皆さん分かっているのだけれど、敢えて口に出されると恥ずかしかったり照れたりして、そんなこと言われなくたってと思ってしまう。混沌とした、あまりいいニュースの聞かれない時代に生きて、誰もが心の中に隠してしまったものを敢えてミュージカルというエンターテインメントの創造を通して問われているような気がします。

具体的にはストーリーの中で、主人公の川野というのが都会人で強烈にエゴイスティックな性格の持ち主ゆえに、自分は「光」なんて何にも感じないと思い込んでいる。いつも奥さんに何とかしてくれ何とかしてくれと頼りっぱなしで、彼女が死んでからもやっぱりそう思っている訳です。

その彼が故郷(高知のとある田舎)に帰って村人たちと出会い、共にミュージカルを創るはめになってしまう。村人はミュージカルなんて見たこともない訳ですから、とんでもなくど素人で下手くそなんだけど、川野はそんな彼らの取り組む姿勢に素朴さや純粋さを感じて、本当に自分が創りたいエンターテインメントにはこういう精神性が必要なんだと気づき、作品のテーマである「光」を《心の中の光》として、素晴らしい作品を作り上げるというお話です。

実は私自身が川野とけっこうダブっているところがあって、今回の参加者と共に創りながら、劇中劇の一部のようにテーマ性も育っていっているように思います。

## 未来の記憶

前半は喜劇っぽく軽いタッチで、出来るだけ肩の力を抜いて見てもらえるような創り方にしたいと思っていますが、それだけでは市民ミュージカルとしての重みというか、今回のテーマ性を表現しきれないと思うので、後半は「光」というテーマ性に重きを置いて、ファンタジックで幻想的な世界を感じていただければと思っています。

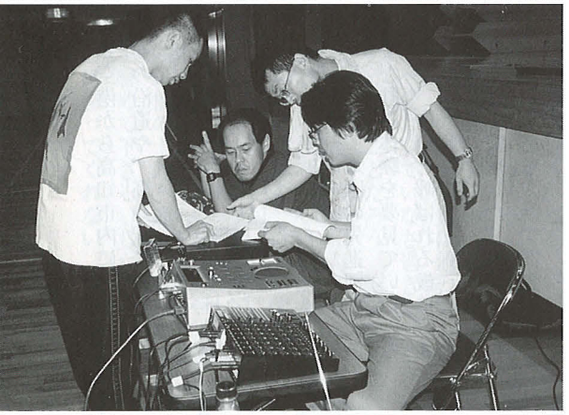
作品のもう一人の主人公に猿猴(エンコウ)が登場します。このエンコウは水の精霊という設定なのですが、物質的な水の世界に生きているものではなく、《水の記憶》の世界で生きている存在として表現しようと思っています。

この作品のキャッチコピーは「わすれられない未来があります」というものですが、エンコウの住む《水の記憶》の世界には《未来の記憶》というものがあって、私たち人間には過去の記憶しか思い出として存在していませんが、エンコウは《未来の記憶》も持っている。未来の記憶といってもピンとこないかと思われますが、デジャブとか予知夢のような現象が、まさに《未来の記憶》と呼べるものだと思うのです。

そこには光に満ちた素晴らしい未来があって、エンコウたちはそのことをよく知っている。挫折した川野にその素晴らしい未来の存在を導き、彼の心の中に「光」をもたらしてくれる。

今回の作品を通して、出演者や観客やスタッフにも、参加される全ての方々お一人おひとりに、そんな輝かしい未来が必ずあるんだということを伝えられたらと思っています。

(てらさわえつじ・演出家)



※公演は10月16日・17日の3回、県民文化ホール(オレンジ)で。
詳しくは裏表紙をご覧ください。

# 南の国に暮らして

## ―アジアの南、日本の南―

島村和典

今年の夏も、高知の雨は強い。幸い、昨年のような大きな被害はなさそうだ。高知に住んで、一年四ヶ月になるが、雨の降り方は大阪や関東とはかなり違う。同じ職場の関東の出身者達も一様に高知の雨の降り様をよく話題にしている。「降りの強さが凄いですねぇ」。私も口を揃える。「まるで、南の国のスコールみたいだ」。

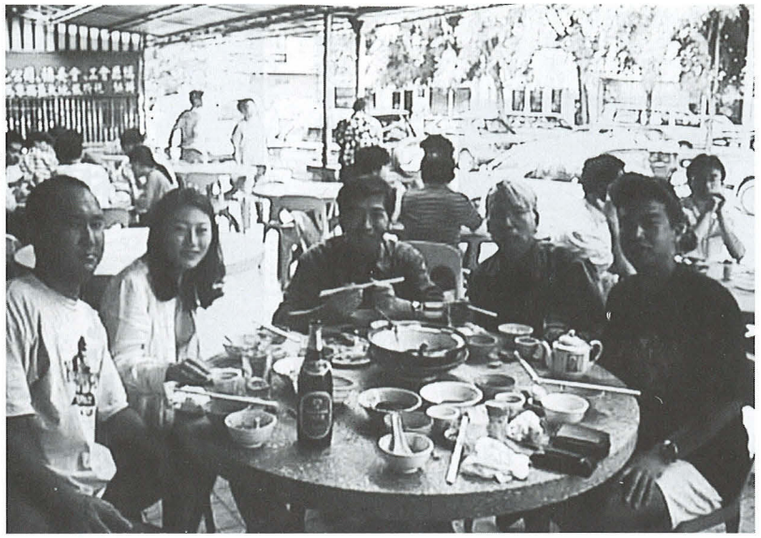
実は、私は高知にUターン就職する直前に、十七ヶ月をスコールの多いマレーシアで過ごした。赤道直下とも言える北緯約三度の首都、クアラルンプール（以下、KL）で暮らした。通信関係の技術コンサルタント等を生業にする現地企業の社長という立場にあった。マレー系マレーシア人の運転手二人、インド系マレーシア人の若い秘書一人と日本人出向者を加え、九人の小さな会社である。ただ、受注に応じて、短期の技術支援部隊を雇っていたので、多い時には四十人程の活気を呈したりもしていた。そのマレーシアで、スコールをたっぷり味わった。そんな事情で、高知の雨を話す時、つい彼の国を思い出す。それと、海外出張の体験の多い知人は高知を訪ねて、「高知はまるでマレーシアのようだね」と感想を漏らされたりする。高知空港から高知市内に向かう最初の沿道や、高知駅から播磨屋橋にかけても椰子並木が屹立している。それに、晴れた日の陽射しの強さ。スコールのような雨にまで遭えば、そういう連想も自然かも知れない。

若い頃、米欧の先進都市での楽な駐在体験を夢見ていた。それが、中年と呼ばれる歳に、開発途上の国で激しく働くことに替わって実現した。外国に暮らすと日本を考え直す機会になると、よく聞いてはいた。私も、いろんな生活場面の中で日本のことを改めて、否、初めて考えたりしたことである。

マレーシアの空港に初めて降り立った時、まるでアジア人種のるつぼかと思った。いろんな顔が溢れ、しかも、汗と雑多な香料の匂いが強烈に襲いかかった。その後判ったが、マレー人には、国籍は同じでも、人種としては、三種類の人達が居る。古くからマレー半島やインドネシア諸島に住んできたマレー系、中国から移り住んだ中国系、インドからの移民の子孫であるインド系の混住である。居ないわけではないが、三人種の混血は極めて少ない。それぞれの人種の人達は固有の宗教と文化を持っているせいだろう。隣に別の宗教を大事にする人が居るだけに、皆、却って自分の宗教を大事にしている。宗教は難しい教義の話ではなく、生活のあり方そのものに結びついている。小さい時から、豚を決して近づけず、牛は食べてきたマレー系の人達は、豚を日常の食材にしている中国系の人達と食卓を一緒にすることは殆ど無い。牛を神聖な動物とし、多くの偶像の登場する神話に彩られたヒンズー教のインド系の人達は、牛を食べ、偶像崇拝を全く否定しているイスラム教徒のマレー系の人と生活の根源においている宗教観でどうしても相容れない。このような異質な宗教と生活様式を持つ人種の混在はマレーシアの歴史がもたらした。独立の後、人種間の政治均衡をめぐってある時期混乱もあったが、法律の根幹である現憲法は、国教をイスラム教とし、一方で個人の信教の自由を保障している。

クアラルンプール郊外のイスラム寺院、ブルーモスク

ある文化が新しい文化を容認していく時、混ざる場合と溶け合う場合とがありそうだ。マレーシアの場合は、中国文化、インド文化と順に接し、溶け合いをせずにお互いを並存させてきている。自分達の生活のあり様、文化にはこだわるが、隣の別の文化に干渉や攻撃もしない。日本から初めて彼の国に来た方はよく尋ねた。「島村さん、ここ大丈夫、セキュリティは良いの？」。社会基盤の薄さや生活の質について直観的に日本と比べた印象からの質問だったことが多かったと思う。「それは大変失礼なお尋ねですよ。旅行者にこんな安心な国はありません。皆、信心深くて良い人達ばかりです。日本だと社会的に責任のある人でも、誰も見てない、お巡りさんも見ていないとなると、何をするか判ったもんじゃ無い部分がありますよ。ここの人達は、誰も見ていなくても、自分の神様に見られていると律している人達ばかりです。隣に別の宗教を信じる人が居るだけに、皆さん、信心深くて決して悪いことはしませんよ」とよくお答えした。



炎熱の街の鍋物「肉骨茶（バクテー）（豚の骨をゆばと野菜でぐつぐつと煮込んだ料理）」を食す（写真中央が筆者）

一方、「日本は長い歴史の中で、異質な文化に接する度に、具合よく元の文化と溶け合わして、新しい文化を吸収してきたんだ」とよく聞く。この新しいもの好きでそれを吸収していく精神は、高知の人達の気質によく合っているし、近代日本の変革に高知出身の先人達は大いに貢献してきたと思う。「土佐」と呼ばれたある時期、そういう文化の進取の中心地であったと聞かされたし、その土地を郷里に持つことを誇りに思ってきた。雨はこの高知では強く降るものだった。今も、雨をはじめ、気候には厳しさがある。

だが今、少し街に活気が薄いように感じる。それに、三十有余年ぶりの高知の市街風景は他の県の都市に比べ変わっていなさ過ぎる。これはどうしたことだろう。転職間も無い状況でまだ土佐山田町の職場で深夜までうろうろしていて県内を良く知らないせいかもしれない。それでも多くの県外からの訪問者をお迎えしている。お客さん方は、やっぱり高知は他の土地と違うと郷土の雰囲気を誉めて下さる。しかし、「新しい」とは言ってくれない。今、私達は何度目かの社会革命のさ中にいる。社会資本を競って集める資本主義という根っこの原理は同じでも、最も価値のある社会資本が「情報」という新しいものに変わりつつある。この新しい構図の中で、地域が元気であるためには、新しい社会資本である「情報」を量で、あるいは質で誇るかしかない。マレーシアは無謀にも情報の量の集積を目指している。関連して必要な他の社会資本が十分でない場合には、むしろ「質」を考えていく方が良い。情報の質は集めたものの質の良さの他に、情報が独創に富んでいても良い。

日本の南に位置する高知は元来、新しいことの好きなことも特徴であった。今度の社会革命は再び、高知にとって好機である。「進取」とは新しいものを進んで取り入れることにあっただろうが、今度は新しく産み出す、始めることで高知が未来に向かってもっと元気であって欲しい。社会資本なんて難しい視点も、結局はその地域の生活の中で新しいことを試したり、周りの人達が新しく始めることを温かく受け入れる気風がどんどん広がれば繋がっていくと思う。

（しまむらかずのり・高知工科大学大学院教授）

# 回想……日和崎尊夫君のこと（中）

田中白歩

## 煙突事件

中学を卒業して直ぐの夏休みだったと思う。中学校へ集まってクラス会をした。

就職した者、進学した者たちが少しずつ違う人生を歩み始めて、一学期ぶりに顔を合わせる戸惑いの奇妙な一瞬である。半時間もすればすぐ昔の気のおけない中学時代の友にもどれるのに、お互いの中に僅かばかりの違う空間を抱えながらの再会で共通の言葉をさがしている時である。少し硬い空気の中に沈黙の時が流れる。突然彼がポケットからたばこの箱を取り出して吸う真似をするのである。そしていたずらっぽい眼で笑いながら私の反応を試しているのである。

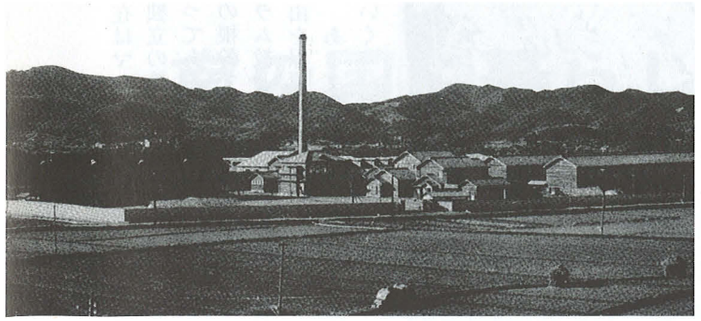
一斉に尊夫に注がれた眼は今度は私に向かっていることを感じる。一学期前までは彼らのクラス担任である。卒業して私の手元を離れたとはいえこれはゼッタイ許すわけにはいかない。久し振りの楽しい級友再会の集いでせっかくの雰囲気を壊すことになるかも知れないが、一瞬どのような言葉が適当かをさがしていたところ、この場の空気をいち早く察した二、三人の女子が、

「日和崎くん、そんなことしなや……」と取りなしてくれて、彼もそれでもと敢えて強行することもなく無事に納まることができた。

それから会は一気に昔の中学時代の雰囲気に包まれていったが、一般の人がやりにくいことを突然やりだす茶目っけが彼にはあった。よき時代の純情ともいえる当時の高校生たちであった。実はたばこに見えたのは、菓子のたばこであったかも知れない。永く彼とつき合った人は彼の突飛とも思われる行動に遭遇したことは一度や二度はあるに違いない。こんな例が次の煙突事件である。

煙突事件とは……。製糸工場跡地に建てられた西高にはまだ高い煙突が残っていて、遠くからでも望むことができた。この高い煙突に登って全校をアッと言わせた事件があった。それが彼であることを聞いて、

「日和（ひわ）ならやりそうなこと……」と思った。滞空時間もかなりになって学校側は降ろすのに苦労しよるとも聞いたが、何のために登ったのか、単なる日和流の茶目っけのいたずら心からか、あるいは他にも一緒に登った者がいてストライキをやったとも聞いたが今は定かでない。今ならさしずめ全国版のニュースになること間違いなしであるが、問題の煙突も間もなく取り払われた。



西高が建てられた郡是製糸の工場跡（昭和33年2月）
（県立高知西高校「創立二十五周年記念誌」より）

## 山脇賞受賞

私は日和崎君の卒業から二年目に城西中から城北中学校に転任になった。そこに尊夫の二人の弟が三年と一年にいてそれがたびたび職員室へ呼ばれて注意を受けている。日和崎というあまり多くない名前で、それが尊夫の弟だと分かるには時間がかからなかった。

私は尊夫の受け持ちだったことから弟にとっては兄貴の先生ということで一目おいてくれていたフシがある。あるいは尊夫の命令があったかも知れない。二人の弟とも自然に話し合うことができた。

三兄弟に共通するのはあの美しく澄んだ目である。時に凄くなるであろうあの目でにらまれると、同級生はビビるであろうと思う。

中の弟は、卒業後母の手伝いをしながら彫刻をしていたようで、

「僕の般若の面が県展に入選した」と話していたが、素人にしてはなかなかのものだと思った。その後何回か県展彫塑の部で般若の面を見かけたが彼のものであることはすぐに分かった。そうした天分が彼ら兄弟にはあったかも知れないが若くして逝ったのは惜しまれる。

尊夫が県展で山脇賞をもらったことを恥ずかしながら知らなかった。絵を描（か）いていることも知らなかった。

その時分のことだと思う。県庁の東の濠の橋のところでパッタリ出会った。今は取り壊されてない市教委の木造建てが尊夫の後ろに見えていた。

「今どうやりゆうぜ……」と問うと、

「最近彫刻を始めたが面白うてたまらん」と眼を輝かせてほんとにうれしくてたまらんという風である。この彫刻が彼には新しい発見でこの歓びを誰かに話したくて仕方がないという風で話しかけてくる。

「今五、六名の者を集めて教えよる」との話。彫刻について無知な私にこの面白さがなぜ分からないだろうという風なしゃべり方で、その熱心さはこちらにもよく伝わったが、私にはむしろ彼が「五、六名の者を集めて教えよる」と言ったことに心を打たれながら彼の顔を見ていた。時々突飛なことをして人々をアッと言わせた彼が、こんなにまで集中できるものに出合ったことを僕は祝福していた。そして新しい人間の誕生に感動をおぼえながら彼と別れた。

この日のことはもう四十年も昔のことになるのに妙に印象深く思い出されてくる。

## 東京生活

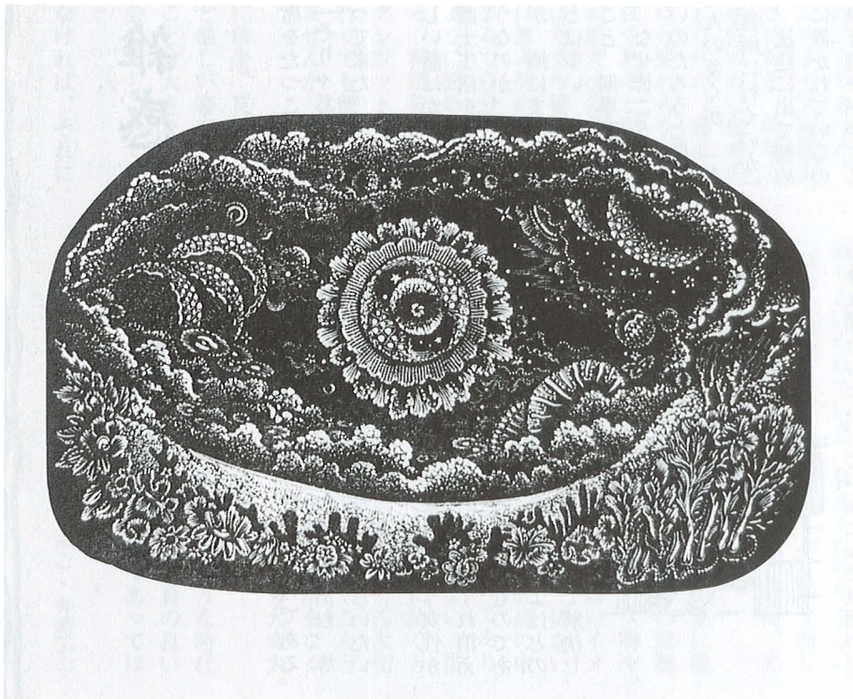
その後上京したことを聞いた。

彼の噂は同級生や彼を知る誰彼となくから耳に入って来た。中央線沿いに居を構えて大分派手にやっているらしいということ、殊に酒が入ると前後の見境がつかないことなども入って来る。それに山崎波浪、服部駿也、浅川博史らの同窓の連中がそれぞれ活発に動いていることを聞いて大いにうれしかった。

中でも彼らとは一回り先輩の越知出身の西一知の消息が分かり、既に詩壇で独自の歩みをしている西卓が西一知と同一人物であることも分かり、彼らと意気投合したつき合いをしていることを知り歓んだものである。

越知、城西という違った場所の違った学年でありながら、私に関係した彼らが親しい交友関係を結んで東京で活躍していることを聞いて、教師冥利に尽きると思いながら自分もまた、しっかりせねばと励まされるのである。

（たなかはくほ・墨線美術協会同人）



日和崎尊夫氏の木口木版画「異星」（三木雅博氏所蔵）

# 高知県人気質と事件　雑感

稲田　知江子

私はもともと千葉県の出身である。弁護士になり、同じく弁護士である夫の司法修習地であった高知へ来た。夫も実は山口県の出身であり、二人とも高知には縁が全くなかったが、こうして高知に住み、生活を楽しんでいることは不思議だなあとつくづく思うことがある。

高知県人については、一般に、酒好き、派手好き、新し物好きと言われるが、本当にそうだなと実感する。

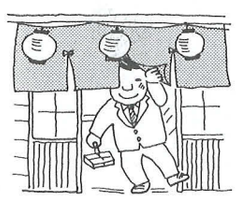
まず酒について言えば、宴会でも最初から日本酒を飲む方がとても多い。返杯にも慣れてしまったが、他県人から見れば、これはまさに高知県人の酒好きを如実に示すひとつの文化である。

最近続けて何度か「高知式の結婚式」に出席する機会があったが、これにも驚いた。なにせ最初から盃がテーブルにのっており、乾杯の後は皆が席を離れてヤアヤアとまるで宴会である。その後のスピーチや歌、ひいては両家の挨拶等聞かずに、酒と会話を楽しんでいる。私が、ある方に「こんなに皆が席をたって人の話を聞かないなんて、すごいですね、関東では席をたつことはないですよ」と言ったら、「そりゃあつまらんねえ」という答えが返って来た。酒の国ならではである。

しかし酒に関しては楽しい話ばかりではない。私は高知でしか弁護士生活を経験していないので他の県がどうなのか、正確に比較することはできないが、酒にまつわるマイナス面を目にすることは多い。

まず、飲酒運転の多いこと。刑事弁護人をやっていて思うのだが、なぜ皆こうも飲酒運転に対して認識が薄いのだろうと閉口する。公判請求を受けた人の多くが、「本当に飲酒運転なんかで刑務所に行くのか」と思っているようであり、法廷に出て初めて自分がどのような立場に置かれているのかを実感する。一度目は執行猶予がつくことが殆どであり、そこで十分反省すれば良いのであるが、ちょっとなら大丈夫、車を邪魔にならないように動かすだけだから、警察には見つからない等と言って、再び同じ過ちを繰り返す。そうなると執行猶予をもらうことは大変難しく、数カ月とか半年とか、刑務所に行くこととなるのである。飲酒運転なら何度やっても罰金で済む、等というデマには惑わされないでもらいたいと思う。

また、酒の上での夫の暴力という女性からの相談もよくある。体の傷はいずれ消えても、心の傷はずっと残っているものである。日本では、家庭内での暴力はよほどのことがない限り家庭内の問題として解決しなければならない、というような風潮がまだまだ根強い。私達ができることにも限りがあるが、最大限の努力をしていかねばならないと思う。



酒は高知の最大の文化である。良い飲み方をしたいものである。

次に、高知県人の派手好き、新し物好き。高知の人は、お金を貯めておくより使うことが好きなようである。新しい店ができれば必ず人が殺到する。買うという決断がとても早い。よく外食する人も多い。ある銀行の方が、「高知は不景気でも皆が金を使って金が流通する。経済的にはその方が好ましい」と言っていらしたが。先日、堅実であることで有名な徳島へ行ったが、町全体の活気は高知の方が格段に上であった。

カードの使い過ぎにご用心（昨年5月、市役所玄関ピロティで）

しかし、やはりこれにもマイナス面はある。近時の自己破産の多さである。昨年であったか、高知県内の一年間の自己破産の件数が千件を超えたと報じられた。凄まじい件数である。人口がさほど変わらない徳島県では、ほぼ半分の件数であると聞いた。

近時、貸金業者の業務の拡大は非常に早いペースで進んでいる。はりまや橋周辺のみならず、バイパス沿いに無人契約機があちこちに出現している。まるで自分の銀行口座からお金を引き出すように簡単にお金が引けてしまうものだから、利用者はますます増えている。また、クレジットカードの普及も著しく、どこへ行っても便利さを強調して、カードを作りませんか、と勧誘がなされる。

このように非常に手軽に借金、買物ができるようになり、それほど厳しい審査もなく貸付等が行われていることは大きな問題であり、そのひずみが社会のあちこちで生じている。

自分自身がしっかりしなければ、それにあっと言う間に飲み込まれてしまう。消費者にとっては、手軽さの反面、自分を守るのは結局自分しかいないという、強い自覚が求められる時代となったのである。

このような中、消費者教育の重要性が唱えられるようになり、近時高校の授業でも取り上げられている。私達も高校生を前に、「ココ山岡事件」を題材にした寸劇を演じたりした（因に私は騙されるＯＬの役、夫は騙す店員の役である）。

自己破産に関しては、戸籍や住民票に破産の事実が記載されるとか、子どもの就職に影響するとかいうまことしやかな噂や、一生世間様に顔向けできんという暗いイメージがあるが、そのようなことは一切ない。事案にもよるが、裁判所へ法的に破産の申立をすることでやり直しはきくのであり、自殺や夜逃げなどする必要は全くない。借金まみれの状態に陥ることを事前に防ぐという、予防的な消費者教育はもちろん大切だが、もし仮に過ちを犯してしまったらどう修正していくかという点で、誤解をなくし、正しい知識を広めていくことも大変大切だと感じる。

厳しい時代ではあるが、このような時代に流されることなく、高知県人気質の良い面を生かして、一層元気な高知であってほしいと願うのである。

（いなだちえこ・弁護士）

## 山はスキーに温泉・キノコ (5)

# キノコなくして秋はなし ①

### アセカキシメジを食する

大森義彦

カキシメジというのがあるが、ここでいうアセカキシメジはその仲間でも変種でもない。僕が勝手に名付けたのである。

ある日、絹色に輝く美しいキノコがひとかたまりになっていた。すぐ食用のウラベニホテイシメジだと思った。だがよく見ると、毒のクサウラベニタケのようでもある。この二つはよく似ているのだ。他にイッポンシメジという類似の毒キノコもある。

いずれかであることは間違いないのだが、そう再々接するキノコではないので、見れば見るほどどちらなのかわからなくなってきた。キノコ図鑑には「ウラベニホテイシメジは木から生え、クサウラベニタケは土の上に生える」と書いてあったのを思い出した。これは地上一メートルぐらいで折れた木の根近くに固まっている。そこで、形はどちらかといえばクサウラベニタケなのだが、ウラベニホテイシメジだということにして持ち帰った。

その夜、試しに手のひら一杯分ぐらいを油で炒めた。不安げに食べてびっくり、マイタケをしのぐかという美味である。翌朝、どこにも異常はなく、「やっぱりあれはウラベニホテイシメジだったんだ」と大喜びして、今度は両手一杯を入れたスパゲティを上機嫌で食する。

今日は日曜日。今にも雨が降り出しそうな空模様だったが、「ウラベニホテイシメジ」に勇気づけられて、食後直ちに前日に続いてキノコ探しに出発。大分走って、なんとなく生唾が出るような気がしたが、特段変わったこともなく長沢に差しかかった。ちょうど食後一時間。額にうっすらと汗がにじんできた。次いで鼻の頭に汗が浮かぶ。暑くもないのに不思議だなと思ううちに、口の周りからも汗が吹き出すようになり、やがて首筋も濡れてくる。ここに至ってキノコ中毒らしいと実感する。

汗が顎先からポタポタ太ももに落ち出す。胸も背中もじっとりし、シャツがびしょびしょになってきた。発汗場所はだんだん下がっていき、太ももからも出始めた。

白猪谷に着いて遊歩道に入るが、もう外は雨になっていて、ズブ濡れの衣類では寒くてたまらないので、三十分足らずで車に引き返す。シャツを着替えたが、それもたちまちびしょ濡れになってしまった。車のヒーターを目いっぱいにかけるが、寒いまま汗が出るので服は一向に乾かない。こうしておよそ三時間、額から膝まで汗が出続けた。

この間、頭や腹が痛くなったわけでもなく、ただひたすら汗が出ただけである。まことに不思議な症状だった。少しだけならなんともなかったし、相当食べても汗をかくだけですむのなら、もういっぺん食べてみたいと本気で思った。

家に帰ってもう一度図鑑を調べたら、クサウラベニタケの毒成分は発汗作用をもたらすムスカリンと書いてあった。だが中毒症状は下痢・嘔吐などとあって、ただ汗をかくだけとはどこにも書いてなかった。

なお、土の上に生えるはずのクサウラベニタケが、なぜ木から生えていたかだが、キノコの権威・近安和雄先生に聞いたら、古い切り株などだと腐葉土のようになっているので、そういうこともあるだろうという話だった。確かにその場所は、木が腐ってまるで土のように黒くなっていた。

ブナ林でキノコ発見

いにしえより、どれだけの人がキノコを食べて死に、下痢や嘔吐に苦しんだのか見当もつかないが、そういう先人の体を張った犠牲の上に、今日毒キノコ、食キノコの別が一応はっきりしているわけだ。

（おおもりよしひこ・高知大学教育学部教授）



## ニューヨーク通信 ③

# 何か特別なもの

奥山 緑

七月末にシカゴに行ってきた。ニューヨークが音楽・演劇・舞踊をひっくるめた「舞台芸術の街」だとすると、「演劇の街」として知られるシカゴである。

シカゴには、映画『フォレスト・ガンプ』で両足を失うベトナム帰還兵役の好演で名をはせた俳優・演出家ゲイリー・シニーズらが創設したステッペンウルフ劇団、'99年トニー賞受賞作『セールスマンの死』を製作したシカゴの最大手非営利劇団グッドマン劇場などの活躍に代表される活気に満ちた演劇市場がある。劇評がきちんと出るシステムがあり、作品の水準はおしなべて高い。夏枯れと言われるこの時期の八月第一週にオープンする芝居だけで十五本もある。

ステッペンウルフ劇場。25年前、教会の地下室で公演を始めて以降、観客数が飛躍的に伸び続けたため、91年に建てた自前の劇場

演劇の街シカゴのみならず、ほかの都市にも、その都市ならではの都市の「顔」となっている舞台芸術がある。例えば、都会を脱出して夏を涼しく過ごしたい芸術ファンの気持ちをくすぐるような夏のフェスティバル。マサチューセッツ州のタングルウッド音楽祭、ウイリアムズタウン演劇祭、ジェイコブズピロウ・ダンスフェスティバル、初夏にサウスカロライナ州で開かれるスポレト・フェスティバルなど、東海岸だけでも数多い。目を引くのは、都会では得られない広い空間を生かした立派な稽古場やアーチスト用居住空間がしばしば併設されていることだ。

フェスティバル以外にも、その都市にしかない特別な芸術プログラムを提供する街は多い。例えば、ミネソタ州ミネアポリスのガスリー・シアター。一九七〇年代に始まったリージョナル・シアター（地域劇団）ブームが去ったいまも、演劇教育プログラムに意欲的に取り組むリージョナル・シアターの雄として全米に名を轟かせている。また、フロリダ州ジャクソンビルにある芸術団体は、地元の温暖な気候を利用して、ニューヨークの舞踊団に、冬季、稽古場を提供し、短い公演を地元観客のために行ってもらうというプロジェクトを計画した。ダンサーが体がこわ張る厳しい寒さを嫌うことに着目した企画だ。

どうしたら、その街ならではの新たな芸術が生まれるかをシカゴの例で考えてみる。現在シカゴの観光名所にまでなっているステッペンウルフ劇団の繁栄の起こりは、創設者ゲイリー・シニーズや個性派俳優ジョン・マルコビッチら、火花の散るような才能が、たまたまシカゴで出会ったからだ。アートに絡む人間が肝に銘ずるべきは、まわりの人間だけでは芸術は生まれないということ。まず必要なのは、才能のある「ひと」、そして、そういう人が集まりたくなる「環境」。シカゴの場合は、優れた演劇科をもつ大学が複数あることが「レベルの高い演劇が観られるシカゴ」を支えている要素のひとつに挙げられるだろう。行政が真剣に自分の街ならではの文化芸術育成を考えるなら、「何か特別なものを創造できるひと」をどう地元で育てていくか、その環境作りに長期戦で携わる覚悟がどこまであるか、ということに尽きるのではないか。

離れていて高知を思うとき、そこに住むこの上なく温かい魅力的な人たちをまず思い出す。きっと高知なら、高知でしか観られない芸術を創り上げてくれるに違いないと信じられるのも、この人たちがいるからだ。ニューヨークから酷暑のシカゴに旅して、高知に思いをはせた'99年の夏となった。

おくやまみどり・舞台制作者。セゾン文化財団国際奨学生としてコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ、芸術経営学科に留学中

高知を撮る

第15回写真コンテスト入賞作品

# ヘルプ

（平成10年　大津）

濵田敬子

昨年の'98高知豪雨で自宅が床上浸水に遭いました。その時、２階のベランダから南と北を撮ったものです。私たちは水害の２日目の夜、自衛隊のボートで家を出ました。

高岡郡越知町の〈横倉山自然の森博物館〉で、6月15日から一か月間、「牧野富太郎と横倉山」展が開催された。

また、11月1日には、五台山頂の県立牧野植物園内に建設中の〈牧野富太郎記念館〉の開館記念式典が行われる予定と聞く。

という次第で、最近、高知県が生んだ世界的植物学者・牧野富太郎博士が、マスコミで、なにかと話題になることが多い。

『「シャベンイッタツ」って言葉をご存じですか、牧野博士の座右の銘らしいんですけど……』、ある日、突然、若い友人から訊ねられて面食らった。

折りよく、6月に、高知新聞社から出版された、上村登（みのる）著『花と恋して牧野富太郎伝』に当たってみると、同博士が、少年時代に、勉学心得や抱負などを書き留めた「赭鞭一撻」という手記があるという。

上村氏が引いている「勉学心得」は、○忍耐を要す、○精密を要す、○草木の博覧を要す、○書籍の博覧を要す、など15項目に及んでいる。

（なお、同書のこの部分が、植物園発行の小冊子『牧野富太郎先生のおもかげ』に収載されていることを、後日知った。）

## 赭鞭一撻（しゃべんいったつ）

風俗歳時記

ところで、「赭鞭一撻」という、この四字熟語は、そもそも何を意味するのであろうか？ 上掲書にも、その説明は見当たらない。

そこで、数冊の漢和辞典を引いてみる。まず、「赭鞭」は「赤く塗ったむち」、「一撻」は「（むちの）ひと打ち」。

古代中国の三皇のひとり神農氏が、赤いむちで百草を打ちつつ味を試して、薬草を探した、という故事に由来し、本草学者（薬草を中心とした医者）を「赭鞭家」という―とある。

これでやっと、若い友人の問いに、答えることができた。

（朴）

河中 ― かつてこう呼ばれた江ノ口川と鏡川に挟まれた地域の人々は、水害に幾度となく苦しんできた。藩政時代には城下を守るために防衛分担区域が定められ、洪水時には士庶の別なく出動させられたという。この割り当ての区間を示すため「水丁場」の標石が建てられた。

鏡川北岸の堤防路に現在も数カ所残る標石は、高知平野を潤す恵みの雨が水害に変わる恐ろしさを、静かに伝えている。

## 風化

# 土佐弁

高収入でもってこいのバイトだった。

同級生Tの方は東京でNHKに入り、教育TVのディレクターになる。自然や環境に関するテーマを主に幾つかの番組に彼の名前を見ている。女性アナウンサーと職場結婚し、公私両面で出生地とは縁が切れたというよりもタブーとなってしまった。

Hは京都の大学を出ると上京し、ルポやノンフィクションのライターを目指した。徒手空拳で週刊誌やPR紙などを舞台に少しずつ仕事の場が広がってゆくが、プロとして食ってゆけるまでには時間がかかった。その間、アルバイトで暮らしを補う。深夜のビル清掃は時間の割りに

番組製作がピークに入ったTが深夜のデスクで仕事をしていると、その背後から肩越しに太い腕がむんずと伸びてきて、吸殻で溢れた机上の灰皿を取り上げ奇麗に拭いて返した。何気なしに振り返ったそこに、高校卒業後久しく会うことのなかったHが立っていた。

「おんしゃあ　こんなくで何をしよらあや」

仰天したTの大声が、がらんとしたNHK局舎内に響き渡ったという。私は、かつて机を並べたこの二人のエピソードが好きだ。

母語である土佐弁とは、こんな風に心の深層に生き続けているものだろう。彼等を始め、同窓生の多くが再び土佐に住むことはない。

でもきっと、その中の誰かが命の終わりに際してこう言うのではないか。「しょお暗いにゃあ　へんしも灯りを持ってきとうせ」。

（南北）

## 第21回市民フロア企画展

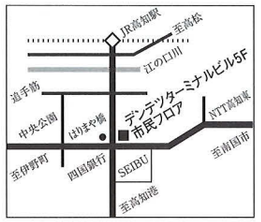
高知市文化振興事業団
創立15周年記念

# 写真展・高知の記録

事業団創立の年1984年より毎年実施している「高知の映像コンテスト」の入選作品展。第１～３回の入選36点と第４～15回の特選23点、計59点を展示します。

〈第11回特選〉湖底の学校　藤原　孝一

1999/9/3(金)～9/12(日)
10：00A.M.～6：00P.M.会期中無休
はりまや橋・デンテツターミナルビル５階




## 今号の表紙

「風化シリーズ　壊律」三木良子

エンピ板に銅・真鍮・アルミ等の金属を彫金・研磨・腐蝕・可色加工したものを組み合わせた、あえていえば金属画。十年近くこの表現方法で制作している。

一昨年、個展会場に「君の最高傑作を返します」と社会人一年生当時の上司が小さな油絵を持参下さった。長い間忘れていたもう一人の自分に再会したようで感動。大事にしていて下さったことに感謝しました。（みきりょうこ）

文化高知 No.91 [隔月発行]
1999年(平成11年)9月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-0870 高知市本町五丁目2番3号
TEL&FAX(088)873-4365/郵便振替01680-5-14869

第4回高知市民ミュージカル・(財)高知市文化振興事業団創立15周年記念事業★平成11年度高知県立県民文化ホール自主文化事業

**1999年10月16日[土]・17日[日] 高知県立県民文化ホール・オレンジ**

開演=16日・6:30p.m. / 17日・1:00p.m. 6:30p.m.＊開場30分前●チケット=［前売り］**2800**円［当日］**3300**円＊全自由席

【チケット発売】県民文化ホール・高新プレイガイド・チケットぴあ・チケットセゾン・ブックスウイル・県立美術館ミュージアムショップ・高知市文化振興事業団■託児室有り［要申込み］

［主催］(財)高知市文化振興事業団・高知県立県民文化ホール（高知県文化財団）

［助成］財団法人地域創造（ジャンボ宝くじ助成事業）

●お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団　TEL 088-873-4365

http://www.i-kochi.or.jp/hp/bunshin　　E-mail bunshin@mail.i-kochi. or. jp